

# アスレティックトレーナーの活動に興味を持つ学生人数の推移と 今後の教育に関する一考察 —スポーツサポート研究会に所属する学生に着目して—

花岡 美智子\*1

A Study on the Number of Students Interested in the Activities of Athletic Trainers and Their Future Education  
—A Focus on Students Belonging to the Medical Section of the Sports Support team—

by Michiko Hanaoka\*1

## Abstract

This study aimed to investigate changes in students' number of the "Medical Section of the Sports Support team" for the past 15 years and examine the direction of athletic trainers (AT) education in the future with Japanese AT programs.

The number of students who belonged to the study group was 656 (303 males and 353 females), and there was no significant change in the number of students over the 15 years, suggesting that students' interest has not declined. However, the number of students tended to decrease as they become senior students.

Currently, the employment status of AT is not stable, and the salary is not sufficient. Therefore, it was suggested that they may not have a clear vision of working as AT after graduation and may have given up studying the field on the occasion of entering the senior year. In the future, it will be necessary to learn ancillary skills throughout their activities with specialized knowledge.

## I. 緒言

1996年に日本スポーツ協会(当時日本体育協会)が認定事業をスタートさせた「アスレティックトレーナー(以降AT)」は、25年経った今、登録人数は2021年10月1日時点で4,729名となった。こ

の25年間で、「トレーニングはアスリートを対象にしたもの」という認識は変化し、一般人に対してダイエットや健康維持の目的からパーソナルトレーニングを提供したり、時間を問わず運動できる環境を提供するスポーツジムが多く設立される

---

\*1 東海大学体育学部競技スポーツ学科

ようになった。さらに健康管理に関するアプリが多数開発され、多くの人がウェアラブルを持ち健康に関心を持つようになった。またメディアでも、筋力トレーニングやエクササイズを指導するトレーナーのテレビ出演が多く見られ、トップアスリートからトレーナーの存在について語られる機会も増えていったように感じる。そのような背景を受け、トレーニングを指導する「トレーナー」という言葉は一般的になり、将来「トレーナー」を目指す若者も増加傾向にある。

「トレーナー」が身近な存在になり、多様な個性、可能性を持つようになった一方で、日本スポーツ協会が認定している AT とは役割やイメージが異なっている部分も出てきている。大学で学ぶトレーナー教育とは資格取得のためのカリキュラムを軸に構成されていることもあり、AT を想定した内容となっている。「トレーナー」と「AT」のイメージが異なることで、大学において初めて AT 教育を受ける学生は、ギャップを感じ、トレーナー全般に対する興味関心を失い、学習への意欲を維持することを難しくするのではないかと思われる。

そこで本研究では、AT という職種に興味を持ち、その分野に関する知識や技術を身につけたい学生が集まり活動している本学の「スポーツサポート研究会メディカル部門」（※1 スポーツサポート研究会）にて詳細記載）に所属する学生を対象に、人数や属性の変遷について調査を行った。当研究会部門は 2007 年に活動を開始し今年で 15 年を迎える。

この 15 年間で部門に在籍する学生の属性が、どのような変化を示しているのかを明らかにし、現在「AT」が抱えている問題と関連づけ、今後の AT の育成、学生指導において知見を得ることを目的とする。

#### ※1 スポーツサポート研究会について

東海大学スポーツ医科学研究所はスポーツ選手の競技力向上と健康・体力増進のための運動に関する各種研究活動を推進している機関である。1996 年には研究所のプロジェクトの一つとして、「スポーツサポートシステム」が日本初の総合的なスポーツ医・科学支援体制として立ち上げられた。スポーツサポートシステムは、「トレーニング

部門」、「メディカル部門」、「メンタルトレーニング部門」、「栄養サポート部門」、「科学的サポート部門」の 5 部門から現役の学生アスリートのみならず中高生やプロ・アマチュアのトップアスリートに対して各領域の専門家や研究者による実践的な支援活動を実施している。（東海大学スポーツ医科学研究所 HP より）

またこの領域に興味を持ち、実践的な活動を求める学生も増えていく中、2007 年に有志が集まり活動を開始し、2010 年にはトレーニング部門、メディカル部門、メンタルトレーニング部門の 3 部門から成る「スポーツサポート研究会（以降 研究会と表記）」が学内の一般サークルとして立ち上げられた。

## Ⅱ. 研究方法

### 1. 対象

2007 年から 2021 年にかけて東海大学スポーツサポート研究会に在籍した学生のべ 656 名（男性：303 名，女性：353 名）を分析対象とした。

### 2. 調査方法

2007 年より毎年 6 月に作成する研究会所属学生名簿より、学生の性別、学年について情報を収集した。

### 3. 分析方法

調査期間中における、在籍人数の変動、男女比、学年比についてその推移を追った。

## Ⅲ. 結果

### 1. 在籍人数の推移

2007 年から 2021 年にかけて、最も多い在籍人数であった年は 2016 年で 63 名、次いで 2011 年 62 名、2017 年、2018 年それぞれ 58 名であった。（表 1、図 1）

### 2. 男女比の傾向

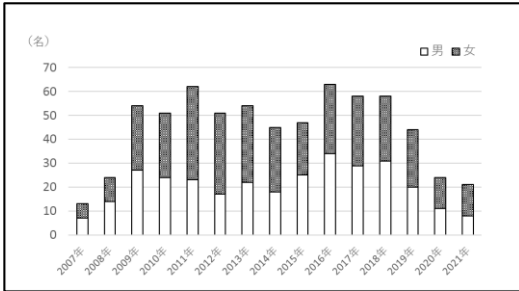
15 年間の在籍記録において、在籍者総数の男女比は、男子が 46.2%、女子が 53.8%であった。2011 年、2012 年、2021 年に男女比 4:6 を超えて男性が少ない年も見られたが、概ね男女比で大きな特徴は見られなかった。（表 1、図 2）

### 3. 学年の傾向

15 年間の在籍記録において、1 年生 190 名

(29.0%)、2年生 178名 (27.1%)、3年生 159名 (24.2%) 4年生 138名 (21.0%) であった。学年に大きな違いは見られないが、上級生になるに従い人数が減少する傾向を示した。(表2、図3)

表1 在籍人数、男女比



	ALL	男	女
2007年	13	7	6
2008年	24	14	10
2009年	54	27	27
2010年	51	24	27
2011年	62	23	39
2012年	51	17	34
2013年	54	22	32
2014年	45	18	27
2015年	47	25	22
2016年	63	34	29
2017年	58	29	29
2018年	58	31	27
2019年	44	20	24
2020年	24	11	13
2021年	21	8	13
ALL	656	303	353

図1 在籍人数の推移

表2 学年別在籍者数

	1年生	2年生	3年生	4年生	大学院	ALL
2007年	10	0	2	1		13
2008年	11	11	2			24
2009年	22	16	10	3	3	54
2010年	9	19	14	8	1	51
2011年	14	15	19	14		62
2012年	12	13	14	12		51
2013年	15	12	13	14		54
2014年	9	15	9	12		45
2015年	18	7	12	10		47
2016年	19	22	9	13		63
2017年	14	16	20	8		58
2018年	16	10	14	18		58
2019年	12	10	10	12		44
2020年	2	8	6	8		24
2021年	7	4	5	5		21
ALL	190	178	159	138	4	656

(単位:名)

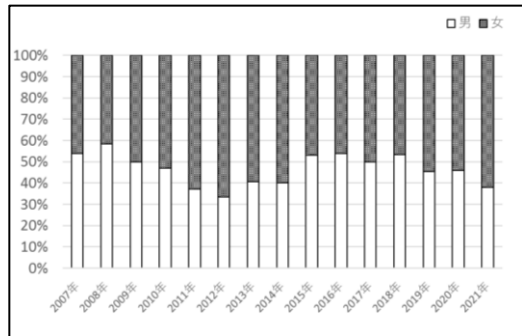


図2 男女比

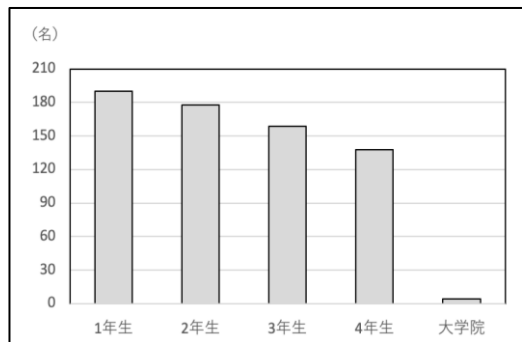


図3 学年別在籍者数

#### IV. 考察

##### 1. 在籍者の変遷について

2007年から2021年までの計15年間、スポーツサポート研究会(メディカル部門)に在籍した学生はのべ656名、一年間の平均在籍者数は43.7名

であった。本研究会部門は主に AT の活動に興味を持ち、その分野を学びたいと希望した学生が入部するクラブであり、これは他大学や専門学校と比較しても多い傾向にある。2020 年以降の在籍人数が 24 名、21 名とそれぞれ減少しているが、これは新型コロナウイルスの感染拡大により、大学において入構禁止、対面での授業が中止、クラブ活動が禁止・制限などの措置がとられたことで、研究会の活動が出来ず新入生の加入が無くなったことが主な原因として挙げられる。また新入生に対して入部を勧誘する機会もなく、実質活動が行われていない状況が影響していると考えられる。実際に、2020 年度は対面での活動は全て中止しリモートのみでの活動、新加入者は 10 月を過ぎてからの 2 名に留まっている。

男女比に関しては、15 年間の総計で大きな差は見られなかったが、比較的女子学生が多い傾向が見られる。公益財団法人日本スポーツ協会が 2018 年に公開した「第一回日本のトレーナー実態調査」<sup>1)</sup>によると、2018 年当初、調査に参加した 1054 人の日本スポーツ協会公認 AT の男女比は男性 838 名 (79.5%)、女性 216 名 (21.6%) と圧倒的に男性が多い現状が報告されている。資格を持たない学生を対象に AT に興味を持つ人数を男女比で調査した研究はなく、他組織における傾向と比較することはできないが、女子学生が男子学生と同等以上の人数で AT に興味を持ち積極的に活動している傾向は特徴的であると言える。AT は競技スポーツにおいてスタッフという位置付けにある。入部動機を確認する中で女子学生は卒業後スポーツの分野に関わりたいと希望し、その職種として AT に興味を抱き入部してくるケースが多く見られる。一方で男子学生は、同世代の学生の多くが選手として活動している中で、スタッフ専任として活動するモチベーションが保てず、活動を途中で断念する場合が少なくない。その結果女子学生の在籍比率が高い傾向を占めているのではないだろうか。

学年比としては、上級生になるにつれて人数が減少していく傾向が見られた。先に示した日本スポーツ協会の調査<sup>1)</sup>では、資格取得後 AT としてフルタイムあるいはパートタイムで活動している割合は 596 名 (56.5%) と半分程度であり、136 名

(12.9%) がボランティアとして無償でトレーナー活動をしている実態が報告されている。またフルタイム勤務でも、約 75% が単年の個人契約であった。さらにトレーナー活動による年収はフルタイム、パートタイム、教育に関する立場を合わせた平均にはなるが、1~100 万円が 37.3% (回答者 673 名中 251 名) という結果が示されている。社会人に向けての活動、準備が活発になる 3・4 年生では、自身の今後の在り方、向き不向き、経済的問題等、勉強に充てる時間の配分などより考える時期に相当する。安定した就業形態、給与が保障されていない AT の現状を理解していく中で、AT とは異なる道を選択する者が増えていることが一因として考えられる。

## 2. 大学におけるアスレティックトレーナーの育成、指導について

本研究の結果より、研究会に所属する学生は上級生になるに従い減少する傾向が見られた。また本研究の対象者で卒業後も含めて日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナー (以降 JSP0-AT) を受験した者はのべ 116 名、資格を取得した者は 19 名である。これは在籍者のべ 656 名に対し、受験をした学生が 17.7% と 2 割に満たない現状である。さらに研究会所属学生の卒業後の進路について調査した著者の報告<sup>2)</sup>では、専門学校進学が 30.6%、一般企業への就職が 25.9%、フィットネス業界への就職が 15.3% であった。これは JSP0-AT が卒業見込みとなる 4 年次になって初めて受験資格が得られること、理論試験の合格率が、2020 年度で 29.4% と他の医療系資格の合格率に比べて低い数値を示し難易度が高いこと、加えて資格取得後に就業形態、経済面で安定した保証がない現状があることなども影響していると考えられる。

以上のことから、研究会に所属する学生が目指すゴールは多様であり、JSP0-AT の資格取得を目指す者、大学時代に学生 AT としてクラブ活動を行いたい者 (将来は別の職に就業)、AT が有する知識や技術を身につけて教員やフィットネスクラブなど他種職業で活動したい者などが混在している可能性が示唆された。

研究会はあくまでも AT に興味を有する学生が集う一団体であり、資格養成のために活動している団体ではない。学生時代にスポーツに打ち込む

学生の多くが卒業後にスポーツを職業として生活することがないのと同様に、AT に関しても学生時代に学んだスキルをそのまま資格取得につなげていく必要はないと考える。その点において研究会の指導はATの資格取得(合格者の増加)を目指すための専門性の高いスキルを習得していく事も重要ではあるが、そのことのみに従事するのではなく、ATに関する活動内容や活動することの楽しさ、それを実施するにあたり必要とされる素養について指導していくことが重要ではないかと考える。

学生トレーナーに活動を通して身につけた力を調査した研究<sup>3)</sup>では専門的能力としてテーピングやストレッチングなどを挙げる一方、コミュニケーションや礼儀・マナー、スタッフとの連携について身につけたという意見が多く挙げられている。専門性の高いスキルに関しては今後時間と経験を積み重ねることで補うことは十分に可能である。より専門的に学びたい学生は専門学校や大学院への進学を選択するだろう。資格取得専門の機関ではない大学におけるATの育成とは、ベーシックな技術と正確な知識を元に、現段階で可能な能力を自ら理解し、周囲と協力しながらチーム内において活動していく素養ではないだろうか。

日本スポーツ協会はATの役割を「本会公認スポーツドクター及び公認コーチとの緊密な協力のもとに、スポーツ選手の健康管理、障害予防、スポーツ外傷の応急処置、アスレティックリハビリテーション及び体力トレーニング、コンディショニングなどを担当する」<sup>4)</sup>としており、具体的にはスポーツ外傷・障害の予防、スポーツ現場における救急処置、アスレティックリハビリテーション、コンディショニング、測定と評価、健康管理と組織運営、教育的指導の7項目を示している。昨今広がりを見せるフィットネス業界、ウエルネス業界において表現される「トレーナー」はこの限りではなく、展開するサービスはその団体によって多様である。そのため、学生には第一にJSP0-ATとトレーナーとの違いについて適切に学び理解を得た上で、ATに関する活動内容について広く学んでいくことが良いと考える。さらに実習活動を通して選手やスタッフとの連携を経験する中で、ATとしてもトレーナーとしても必要とされる連

携をスムーズに行うためのコミュニケーション能力やマネジメント能力、プレゼンテーション力、気遣い、努力する姿勢などを身につけていくことが、将来的にATを育成することにおいて有益ではないかと考える。

## V. まとめと今後の展望

本研究は、スポーツサポート研究会15年間の在籍学生の所属から、アスレティックトレーニング分野に興味を持つ学生の変遷について調査を行ったものである。結果、2020年以降の新型コロナウイルス感染拡大による影響を除けば15年間で大きな変化は見られなかった。しかしこの15年でATに関する世の中の認知度は上がり、学生の職業としての興味も安定している一方で、卒業後の就業形態に関しては大きな発展はなく、学生が将来不安を抱え上級生では当該分野への学習を断念している傾向が示唆された。

学生が入学時に有していた学習意欲を維持するためには、ATとトレーナーの違いについて理解を促し、専門的な知識だけでなく、活動を通して学べる付随的な能力にも焦点を置き指導をしていく必要があると考える。

今後は、研究会に在籍している学生がアスレティックトレーニングの分野に抱く興味を維持させつつ、多くの能力が向上できるよう、ATの持つイメージや活動内容について詳細に調査を行い、ニーズに応じた指導ができるよう分析を行っていきたい。

## 引用参考文献

- 1) 公益財団法人日本スポーツ協会(2018) 第一回日本のトレーナー実態調査 日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナー(JSP0-AT)版報告書
- 2) 花岡美智子・宮崎誠司(2017) 体育学部を有する大学においてAT教育を受けた学生の卒業後の活動に関する一考察, 第6回アスレティックトレーニング学会学術集會プログラム・抄録集, pp47
- 3) 花岡美智子・寺尾保・中村豊・宮崎誠司(2016) 東海大学における学生トレーナーの活動について, 東海大学スポーツ医科学雑誌. 第28号, pp67-74
- 4) 公認アスレティックトレーナー専門科目テキスト第1巻 アスレティックトレーナーの役割, 公益財団法人日本スポーツ協会(2020)